

「前田正名研究会 令和6・7年度活動報告」

藤崎 公晴（前田正名研究会代表）

はじめに

(1) 自己紹介およびネットワークづくり

鹿児島県出身で明治から大正にかけて官僚として、また民間において殖産興業（特に地方産業の振興）を推進し、「布衣の農相」と呼ばれた前田正名（弘庵）[1850～1921]を研究するサークルを設立した。（2024年7月13日）

前田正名ゆかりの「薩摩辞書之碑」がある鹿児島県立図書館の研修室を借用して、①研究発表や②参加者どうしの情報交換（フリートーク）などを行う活動をしている。

(2) 研究会設立のきっかけ

- ① 令和3年度黎明館企画展「前田正名－「布衣の農相」と呼ばれた男－」
- ② ライフワークとしての前田正名研究

1 令和6・7年度活動報告

前田正名研究会は現在、会員25名。シニアの歴史愛好家、遠方からの参加者（都城市、垂水市、山川町、指宿市、南大隅町の若い移住者（県外より）ほか）、参加者（ほぼ20～25名程度）の肩書きも大学教員、著名な町歩きの達人、観光ボランティアガイドなどであり、様々な方々と楽しくネットワークを築くことができた。

さらに、設立者（藤崎）以外の会員による研究発表もおこなわれるようにになった。特に、井手弘人氏（長崎大学人文社会学系准教授）においては、前田正名における「自治」システムの構築支援という観点から、大学院のカリキュラムマネジメントの授業でも扱っている「システム思考」の視点も加えて、現代と過去を前田正名でつなぐという研究発表がおこなわれ、「パブリック・ヒストリー」という視点を指導していただいた。（今まで自分自身が意識していなかったが、）パブリック・ヒストリーについて概略すると、専門家だけでなく多様な人々が協力し、「現場」で過去を研究・実践することで、現在や未来の現実世界を構築しようとする歴史学の営みであり、パブリック・ヒストリーは、以下の3つの意味合いを持つ。

- ①公的な歴史学：国家や地方行政などの公共部門に關係する公式な歴史学。
- ②共通の歴史学：特定の誰かではなく、すべての人々に關係する共通の歴史学。
- ③開かれた歴史学：誰に対しても開かれている歴史学。

この分野は、博物館、文書館、図書館、遺跡・遺物を通じた歴史だけでなく、歴史書、小説、演劇、映画、テレビ、ラジオ、漫画、ゲーム、さらにはインターネット空間を介した歴史など、多岐にわたる対象を扱う。2000年代初頭に日本でこの言葉が使われ始め、急速に拡大・成長している研究領域である。従来の専門的な歴史学（アカデミック・ヒストリー）とは異なる、一般市民が歴史を認識し、語り、書くという「単純な事実」を重視し、人々の日常生活における歴史実践に焦点を当てている。

そこで、今までの研究発表の内容と告知チラシを示す。

- 【第1回】令和6年8月31日（土）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第2研修室）
「前田正名の生涯について」 藤崎公晴（鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭）
- ・研究会発足について／前田正名の業績について／令和3年度黎明館企画展
「前田正名」／近代日本のプロデューサーは薩摩藩士（前田正名）だった？！
-
- 【第2回】令和6年10月12日（土）10:00～11:30（鹿児島県立図書館第1研修室）
「前田正名と松方正義」 藤崎公晴（鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭）
- ・前田正名と松方正義の関係性について／興業意見の対立／1878年パリ万博
-
- 【第3回】令和6年11月17日（日）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第1研修室）
「前田正名自叙伝を読む①」 藤崎公晴（鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭）
- ・前田正名自叙伝（上）：『社会及国家』No251、1937年2月号（一匡社）
-
- 【第4回】令和6年12月7日（土）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第1研修室）
「前田正名自叙伝を読む②」 藤崎公晴（鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭）
- ・前田正名自叙伝（下）：『社会及国家』No252、1937年3月号（一匡社）
-
- 【第5回】令和7年1月11日（土）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第1研修室）
「前田正名関係文書の分析」 藤崎公晴（鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭）
- ・前田正名関係文書（その1）目録・（その2）目録（国立国会図書館）
- ・小林愛「前田正名関係文書」の構造分析（国文学研究資料館紀要）
-
- 【第6回】令和7年3月8日（土）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第1研修室）
「前田正名「上海日記」を読む」 藤崎公晴（鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭）
- ・前田正名「上海日記」：『社会及国家』No253、1937年4月号（一匡社）
-
- 【第7回】令和7年6月15日（日）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第1研修室）
「前田正名とパリ万博」 藤崎公晴（鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭）
- ・万国博覧会の役割／1878年パリ万博（前田正名、松方正義、鮫島尚信）
-
- 【第8回】令和7年8月30日（土）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第1研修室）
「鹿児島の『町村是』－薩摩郡樋脇村の事例」 井手弘人（長崎大学人文社会科学域教育学系准教授／会員）・歴史社会学の理論的視座／前田正名を中心とした「町村是運動」：『興業意見』からの展開過程／薩摩郡樋脇村の事例／日本における「自治」の変遷について／「歴史生態学」の視点を加えて
-
- 【第9回】令和7年10月4日（土）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第1研修室）
「英医W. ウィリスの鹿児島での足跡①」 橋元謙一郎（医師／会員）
- ・ウィリスの研究（本）／ウィリスの鹿児島での活動（業績）／英医ウィリアム・ウィリス略伝
-
- 【第10回】令和7年11月22日（土）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第1研修室）
「前田一歩園について①」 藤崎公晴（鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭）
- ・前田正名の地方産業振興策と地域形成（「五二会資料」の分析から）／「義父前田正名の思い出」（前田華子）／葬式列車の様子／前田正名の私生活
-
- 【第11回】令和8年1月24日（土）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第1研修室）
「英医W. ウィリスの鹿児島での足跡②」 橋元謙一郎（医師／会員）
- ・鹿児島での住居はどこか？／明治10年鹿児島市街の状況①（1月～4月）・②（5月～9月）／西南戦争の戦災経過など
-
- 【第12回】令和8年3月8日（日）14:00～16:00（鹿児島県立図書館第1研修室）
「南大隅の地域史～創作講談の切り口から～」 大杉祐輔（南大隅町移住コーディネーター）・地域史発掘の取り組み／南大隅町大久保集落に伝わる昔話
- 「前田一歩園について②」 藤崎公晴（鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭）

- ・前田一歩園の由来／前田一歩園財団とは／前田一歩園をとりまく自然／自然保護に関する諸活動／前田正名関係文書について

前田正名研究会 (第12回)



前田正名写真
(国立国会図書館「近代日本人の肖像」より)



薩摩辞書之碑 (鹿児島県立図書館前)

日時：令和8年3月8日（日）

（13:30受付開始）14:00～16:00

場所：鹿児島県立図書館 第1研修室

内容：研究発表1 「南大隅の地域史～創作講談の切り口から～」
大杉祐輔
(南大隅町移住コーディネーター)

研究発表2 「前田一歩園について②」 藤崎公晴
(鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭)

・参加者どうしの情報交換、フリートークなど

※ 要予約／先着40人／資料代200円

・県立図書館には問い合わせなどの電話をしないでください。
申込先（問い合わせ先）：前田正名研究会【事務局】
電話：090-5948-6323（藤崎）

前田正名研究会とは・・・

鹿児島県出身で明治から大正にかけて官僚として、また民間においては農業生産の振興）を推進し、「布衣の農業相」と呼ばれた前田正名（1850～1923）を研究するサークルを設立しました。令和6年（2024）7月13日（土）第7回研究会を開催します。前田正名ゆかりの「薩摩辞書之碑」がある鹿児島県立図書館の研修室を借りて、①研究発表や②参加者どうしの情報交換（フリートーク）などを行なっています。

★公式X（旧ツイッター）をはじめました。（令和6年（2024）7月28日）

前田正名研究会 (@masana_kenkyu) フォローや拡散をお願いします。

（令和7年度のスケジュール）（予定）

※研究発表者や発表内容（タイトル）は都合により変更する場合があります。
あらかじめ御了承ください。

【第7回】令和7年 6月15日（日）14:00～16:00【第1研修室】

研究発表「前田正名とパリ万博」 藤崎公晴
(鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭／元鹿児島県議会議員・農業センター農業研究会会員)

【第8回】令和7年 8月30日（土）14:00～16:00【第1研修室】

研究発表「鹿児島の『町村是』－薩摩郡樋脇村の事例」 井手弘人
(長崎大学人文社会学域教育学系准教授)

【第9回】令和7年10月 4日（土）14:00～16:00【第1研修室】

研究発表「英医W. ウィリスの鹿児島での足跡①」 橋元謙一郎
(前田正名研究会会員)

【第10回】令和7年11月22日（土）14:00～16:00【第1研修室】

研究発表「前田一歩園について①」 藤崎公晴
(鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭／元鹿児島県議会議員・農業センター農業研究会会員)

【第11回】令和8年 1月24日（土）14:00～16:00【第1研修室】

研究発表「英医W. ウィリスの鹿児島での足跡②」 橋元謙一郎
(前田正名研究会会員)

【第12回】令和8年 3月 8日（日）14:00～16:00【第1研修室】

研究発表1 「南大隅の地域史～創作講談の切り口から～」 大杉祐輔
(南大隅町移住コーディネーター)

研究発表2 「前田一歩園について②」 藤崎公晴
(鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭／元鹿児島県議会議員・農業センター農業研究会会員)

問い合わせ先】前田正名研究会 tel. 090-5948-6323（藤崎）

2 前田正名の略歴

前田弘庵（正名）は、嘉永3（1850）年3月12日、薩摩の漢方医・前田善安（善庵）の六男として生まれ、9才の時に洋学者八木称平（玄悦）の門下生となり、慶応元（1865）年、長崎へ藩費留学を果たし、何礼之の語学塾に入門した。その後、海外留学を果たすために兄・献吉、高橋新吉と共に編纂した『和訳英辞書』（通称『薩摩辞書』）を明治政府に買い上げてもらうことに成功し、さらに、大久保利通や大隈重信のはからいでフランス留学を果たす。

7年間のフランス留学で学んだ農学の知識を買われ、内務省三田育種場の開設に取り組み、その後、1878年パリ万博の事務官長として再び渡仏する。しかし、開会まもない明治11（1878）年5月14日には、前田の強力な後援者である博覧会総裁の大久保利通が紀尾井坂の変で暗殺される。万博終了後もパリに残った前田は、三井物産の支店開設の援助に当たり、翌12年5月に大蔵省御用掛・商務局勤務を命じられ帰国する。

フランス農商務省で行財政を学んだ経験から、「大限財政」下の大蔵省にあって直輸出論を提唱し、大限ブレーンのひとりとなる。また、農商務省・大蔵省それぞれの大書記官となり欧州産業経済事情調査に出張し、帰国後は品川弥二郎らと組み経済政策を構想した。明治17（1884）年3月より農商務省で『興業意見』編纂に取り組み、「松方財政」を批判し、殖産興業資金の追加供給による強力な産業保護政策を主張して松方正義大蔵卿と対立した。のち

に山梨県知事を経て農商務省に復帰し、農商務次官となるが、大企業優遇の経済政策をとる政府主流派の政策に同調できずに官界を去る。

同25年以降、全国を簡素な姿で行脚しながら、陶磁器・織物・茶など、地方在来産業の振興に尽力したため、「布衣の農相」と呼ばれている。地方実業団体、全国農事会を系統組織化し、政府や議会にそれら団体の要求を建議する活動を行うなど地方振興に取り組んだが、晩年は不遇に終わった。

3 「前田正名自叙伝」の紹介

(1) 雑誌『社会及国家』について

前田正名の「自叙伝」なるものは三男の前田三介（1880～1939）が同窓のジャーナリスト関口泰（1889～1956）に相談し、月刊誌『社会及国家』で昭和12年（1937）に発表したものである。

- ①前田正名自叙伝（上）：『社会及国家』No251、1937年2月号（一匡社）
- ②前田正名自叙伝（下）：『社会及国家』No252、1937年3月号（一匡社）
- ③前田正名「上海日記」：『社会及国家』No253、1937年4月号（一匡社）

なお、関口は『社会及国家』の主要執筆者であり、社員の中でも長期にわたり多くの記事を掲載した人物である。

関口 泰（せきぐち たい／1889～1956）明治43年一高、大正3年東京帝国大学法科卒。台湾総督府から転じて大阪朝日新聞、東京朝日新聞の論説委員として活躍した。横浜市立大学初代学長。父は関口隆正（漢学者）、伯父は新村出（『広辞苑』編者）。筆名は瀬名黙太郎、黙など。判明している限りでは最多の280本を寄稿した。

(2) 一匡社について

一匡社は、大正2年（1913）4月に結成されたいわゆる政治結社である。「一匡」とは、「天下を正す」という意味であり、『社会及国家』は一匡社によって発行された同人雑誌である。政治・経済・国際問題等に関する時事評論を中心に掲載し、大正2年（1913）年9月から昭和16（1941）年4月まで、28年間に全297号が発行された。同人誌としては長期にわたる発行期間もさることながら、「社員」と呼ばれた同人のほとんどが旧制第一高等学校と東京帝国大学の同窓生であるという点で、特異な雑誌である。目次には大正・昭和の政財界・ジャーナリズム界で活躍した人物の名が散見され、「帝大コミュニティ」ともいえる広大で多彩な交友関係が繰り広げられている。

しかし、『社会及国家』は、言論統制や出版統制の強化にともない297号をもって廃刊となる。目標であった300号を目前にした廃刊であり、最終号の編集後記でも「本誌の休刊は発展的休息」と復刊への意欲を覗かせているが、残念ながら雑誌が再開されることとはなかった。なお、一匡社は『社会及国家』の終刊後も活動を続け、定期的な会合は戦後も長く続いた。

(3) 「前田正名自叙伝」

（注）適宜ルビを付した。また、旧字体を一部常用に改めた箇所もある。

親のことを子が言ふのは、言ふ方も又聴く方も余り佳いものではない。然るに、偶々、親父の自叙伝を見出したので、読むでみると少なくとも自分には少なからず興味と感激を、そゝられたので、つい閑口泰君に嘆した處、それは一つ此の雑誌に出してみてはといふ様なことで、茲に掲げる仕儀になった訳だ。

それで前書として、先以て上記の通り、一応読者諸君の御宥恕を乞ふと同時に、左の二点をお断りして置きたい。第一は此の自叙伝が甚だ簡略な点である。蓋し、頼まれる乍に、口述したのを誰かゞ、文に綴ったものと思われるが、父上が自分一個の経歴した事実等には始めから、重きを置かないで専ら、社会國家を裨益せんとする耿々一片の赤誠から、寧ろ私見を理解して呉れることに役立つと思ふ事実のみを最少限度に、述べてゐる点である。残れる我等にとり、遺憾といふより殆んど、遣る瀬ない想である。が、史実に就ては更に、材料を集め又傍系の史料からもう少し、具体的の伝記に完全したいと思ふ。第二には此の自叙伝は、明治十一年（西暦一八七八年）の仏国巴里大博覧会を以て終つてゐる。夫れ以後に就いても又、別に自叙伝的のものがあるので、二三回引続いて載せて見たい。

父上も既に歴史的存在に成つて了はれた。「知る人ぞ知る」と云い度いが、夫等の人々もまた既に故人になられた。唯、高橋是清翁の物された、翁の『自叙伝』の中に、殊に、引続いて出版された翁の『回想録』中に、「殖産興業界の恩人前田正名君」の一項が、父上事蹟の片鱗を記念しては過ぎない。

最後に一つお願がある。読者中に若し此の自叙伝を具体的伝記に完成するに役立つ資料の御心当りがあつたら、小生迄御通知を受け度いと思ふ。

目 次 [自叙伝（上）が第一章～第五章／自叙伝（下）が第六章～第十三章]

- 第一章 八九歳既に殖産の興味を感じ
- 第二章 長崎に於いて遍く志士と交る
- 第三章 薩長連衡の密使となる
- 第四章 危難を犯して長州に入る
- 第五章 洋行資調達の為めに薩摩辞書の編纂に着手す
- 第六章 征途に上る
- 第七章 文明諸国の設備に驚く
- 第八章 滞仏中の雑事
- 第九章 巴里籠城経験
- 第十章 巴里万国博覧会の為めに帰朝す
- 第十一章 出品の準備を急ぐ
- 第十二章 準備成りて再び仏国に行く
- 第十三章 博覧会準備の特点

以前、鹿児島テレビ（KTS）開局50周年記念ドラマ「前田正名－龍馬が託した男－」（2019年）が放映され、前田正名と坂本龍馬との関係性がメインテー

マとして描かれていた。小柄な前田正名（当時16歳）が長い刀を地面に引きずるように歩くのを見た坂本龍馬が自分の短刀を差し出すシーンは、「第三章 薩長連衡の密使となる」中の「(前略) 正名亦一行に加はらんことを希望せしが、愈々出発せんとするに際し、坂本龍馬は余の刀を見て「曰く君の刀は少しく長きに失すれば、余の刀を帶して行かれよ」と云ひて、其の佩刀を取りて正名に帶せしめたり。當時坂本龍馬は京都より薩長の間に奔走斡旋せる際なりしが、正名又彼の非常に愛する所たりき。(後略)」が該当する。

なお、この短刀（正しくは拵）は前田正名の御子孫の方から令和3年に鹿児島県歴史・美術センター黎明館へ寄贈され、黎明館企画展「前田正名－「布衣の農相」と呼ばれた男－」（会期：令和3年10月1日～12月12日）において目玉資料として展示された。（企画展担当が藤崎）

ちなみに、資料名は「前田正名所用拵」（長さ98.5cm）、キャプションは「坂本龍馬から託された拵と伝わっている。柄下地には白鮫皮が張られ、縁頭に雷雲、鐔の表に鳥居、裏には屋形船、鑓に波をあしらったものである。」としている。

（4）前田正名の業績

前田正名が死去（福岡にてチフスによる）した翌日の新聞記事（東京朝日新聞／大正10年（1921）8月12日）を紹介する。

「逝ける前田正名翁」という晩年の柔軟な表情の顔写真とともに「我國勸業の先覚者 前田翁の経歴」という記事がある。

貴族院議員従三位勲三等前田正名氏は曾て五二会会长として我国勸業の先覚者である事は周知の事実である。氏は鹿児島県士族にして嘉永三年三月生れ、仏国へ留学次いで仏国公使館附二等書記生を振出しに爾来宮内、内務、大蔵各省に歴任し再び転じて外交官となり更に大蔵、農商務、文部等の御用掛となり、山梨県知事より農商務省工務農務両局長兼農林学校長たり。其後農商務次官に累進し元老院議官となり明治三十七年より勅選として貴族院に列し其間屢々欧米視察を遂げた。普仏戦争当時巴里籠城の辛酸を嘗めたる事は世人の熟知する所。最近は農事に志し日本内地各府県を巡回して専ら産業奨励に努めつゝあつた。

7年間のフランス留学を終えた前田正名は、リンゴ・ブドウ・ナシなど多くの果樹の種苗を持ち帰った。それまでの五穀偏重の農業から果樹・野菜などを中心とする農業へ転換しようとした。そこで、新設した三田育種場に国内外の種子を各地に拡散させる種子交換会としての機能を持たせた。また、徹底した土壌調査や気候風土と農作物の適性を考慮した適地適作を推進して、地方産業の育成をはかるとした。官僚時代，在野時代において前田正名が携わった産業は数知れない。

- ① 阿寒湖の自然保護
 - ② 弘前のリンゴ
 - ③ 山形のさくらんぼ
 - ④ 山梨のブドウ、ワイン
 - ⑤ 静岡の茶
 - ⑥ 京都の養蚕
 - ⑦ 兵庫のマッチ
 - ⑧ 神戸のオリーブ
 - ⑨ 鳥取の梨
 - ⑩ 福岡の石炭
 - ⑪ 熊本のスイカ
 - ⑫ 沖永良部のエラブユリ など
- さらに、官僚時代は高橋是清とともに特許制度を整備したり、山梨県知事時代は質素を重んじて「日の丸弁当」の提唱者といわれている。

(5) 編集後記（編輯樂苦）から当時の世相を知る

3号（『社会及国家』No251～No253）とも巻末にあるため筆者は編集後記（編輯樂苦）の記述が目に入った。当時の世相が分かる記述と思われる所以ここに紹介する。

昭和12年（1937）2月号の「編輯樂苦」には、

◇國民には判然せぬ理由で内閣が倒壊した。國民には判然せぬ筋道で新内閣が成立した。この内閣も、或ひは國民には判然せぬ理由で衆議院を解散するかも知れぬ、といふ。しかし國民は恬として澄ましてゐる。いつの間にかこの國にも傳説は甦り、「民をして唯依らしめむとする」治世にかへつたのかも知れない。◇「軍民一致」といふことは、軍と民とを別なものと解しての表現である。この點、濱田老の論理は正しい。形式論理學の誤謬が一國の内閣を倒し得るとは今まで思ひ及ばなかった。◇内閣が變つたからとて、もとより國際情勢に大變化が起らうとは思はれぬ。その間に處して取つた責任にも亦。この點現臺閣諸公の覺悟や如何。◇ラッコール伯がせき込んで來た。老人の氣早とばかり言つてはゐられまい。（邑）

昭和12年（1937）3月号の「編輯樂苦」には、

◇暖波、暖波で今年は大へんな温氣だ。二月以来、東北北海道を除いてはスキーも自由でなく、鐵道省が毎日發表する『適』も、當にならぬこと夥しかった。『稍適』『一部適』に至つては笑止千萬で菅平へ行つて靴を泥だらけにしたり、赤城をスキーかついで登つたり、これではこの夏はさぞサンド・スキーがはやることだらう。さうでもしなければスキーヤーの足がおさまるまい。◇自然界の影響で、人の心も至極のんびりしてゐる。一年前血なまぐさい事件のあつたのはどこの國であったか？準戦時體制とはどういふ事だつたか？◇これも亦、温度の上昇と比例して、物價は鰐のぼりの傾向を辿つてゐる。それでも國民はわりにのんきな顔をしてゐるところを見ると、誰かの言つたやうに、「日本國民はこればかりの増税や軍費ではビクともしない底力を具へてゐる」のかも知れない。◇議會は開かれてゐるらしい。春霞の奥で、國民から遊離した内閣と議員とで何やらのんびりやってゐるらしい。（邑）

昭和12年（1937）4月号の「編輯樂苦」には、

◇延長した揚句その最終日の解散！議員も啞然としたが、國民も呆然とした。取るだけの豫算をとつて、まるで「食ひ逃げ」だと、新聞子は評した。◇最も強硬に解散を主張したのは、米内海相と結城藏相だといふ。これでは「食ひ逃げ」にはならない。亭主と腹を合わせた「食ひ逃げ」といふのではない。しかし、何か、公明でない暗さを感じさせたのは事實だ。◇もう少し國民が沸き立てば、思ふ壺であつたかもしれない。しかし國民は沸き立たなかつた。一時沸いたが、すぐケロリとした。日本人は思ったより憚巧だよ。けれどもこの憚巧さには多分に危険がある。◇ともかく解散を無駄にしないことだ。せいぜいいゝ議員を選んで世の中を明るくすることだ。◇果然『神風』の大成功！校正中に快ニュース来る。久しぶりで肩を張り

大手をふって歩ける氣持だ。（邑）

約90年前（1937年）の3号分の編集後記を見ると、複数の内閣倒壊、温暖化（暖冬）、政府要人の暗殺、物価高、衆議院解散、国民の政治的無関心など、昨今の日本の状況とあまり変わらない状況が記されている。また、国民の社会全体（世の中）に対する危機意識が低いこのような状況で、数ヶ月後には日中全面戦争（1937年7月に盧溝橋事件／第1次近衛文麿内閣）へと突入していく。

なお、雑誌中の広告を見渡すと、一匡社の『社会及国家』（昭和12年（1937）3月号）の定価は30銭という記載がある。（ちなみに、世界文化社の『世界文化』（昭和12年（1937）3月号）の定価は25銭という記載もある。）

おわりに

（1）今後の活動抱負

- ① 定例会への参加者を増やす / ② 外部講師への講演依頼
- ③ フィールドワークの実施 / ④ 研究報告書の発行
- ⑤ 会員どうしの交流・ネットワークづくり

（2）研究発表者の呼びかけ

どなたか研究発表（資料紹介、情報提供、ローカルエピソードなど）をしてくださる方はいらっしゃらないでしょうか？

発表内容は「前田正名」に関するだけでなくても、同時代（幕末～大正）の事項や人物（松方正義、鮫島尚信、五代友厚、東郷平八郎、大久保利通、西郷隆盛、西郷従道など）、鹿児島に関することなど、何でも自由です。

【参考文献】

- ・『社会及国家 No251～No253』（一匡社）1937年
(正田健一郎編『明治中期産業運動資料』第19巻（日本経済評論社）1979年に所収)
- ・小関有希「雑誌『社会及国家』解説・総目次－一高・帝大同窓生というネットワークー」（『リテラシー研究』10号、リテラシー研究会）2017年
- ・祖田修『前田正名』（吉川弘文館）1973年
- ・祖田修『地方産業の近代化構想－前田正名の思想と運動』
(『祖田修著作選集』第2巻、農林統計協会) 2017年
- ・寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生』（思文閣出版）2017年
- ・藤崎公晴「前田正名－「布衣の農相」と呼ばれた男－」（『令和3年度黎明館企画展図録』、鹿児島県歴史・美術センター黎明館）2022年
- ・藤崎公晴「【資料紹介】前田正名自叙伝（上）」（『鹿児島史学』第70号、鹿児島県高等学校歴史部会）2025年

〈自己紹介〉藤崎公晴（ふじさき きみはる） 1969年 鹿児島市生まれ

1992年4月～2020年3月 高等学校教諭（地歴公民科）：志布志、甲南、大島、国分、伊集院

2020年4月～2024年3月 鹿児島県歴史・美術センター黎明館 学芸専門員（近現代担当）

・黎明館学芸講座「「川路利良の再評価の動き」に関する資料整理」（2021.2.20）

・黎明館企画展「前田正名－「布衣の農相」と呼ばれた男－」（2021.10.1～12.12）担当

・黎明館企画展「鮫島尚信－日本の外交官第1号－」（2022.11.29～2023.2.19）担当

2024年4月～鹿児島県立伊佐農林高等学校教諭（現在）／【所属学会】明治維新史学会